

第 7 章

さらなる授業改善に向けて

第7章 さらなる授業改善に向けて

教養教育改善充実特別事業作業班

班長 小田隆治

はじめに

今年度、山形大学の教養教育は大学評価機構から評価を受けた。そのうちFDは、教養教育を検討するための組織が整備され、教養教育に係る調査・研究を行い、報告書を作成し授業改善を進めていることが、具体的に成果として現れており、特に優れている。FDに関しては、学長を先頭にしたFD合宿セミナーにおける「科目設計」のプログラム作り等、特色ある取組である」というように、非常に高い評価を得ることができた。こうした外部評価は我々の自信にもつながっていく。山形大学教養教育のFDは、山形大学が誇れる財産の一つに成長してきた。

いま、平成14年度の「山形大学教養教育改善充実特別事業」が終了した。本年度は、財源確保の問題から事業の着手が著しく遅れてしまった。それでも周囲の暖かい支援によって、昨年度と同様の質と規模のFD事業を達成することができた。これでまた一歩、山形大学教養教育の改善が進んだと確信している。

最後の章となる本章では、今年度のFD事業全体を振り返りながら、山形大学教養教育の授業改善ならびに教育改善の進路を模索していきたい。

FDを実施するための財源

山形大学教育方法等改善委員会（前・教養教育研究委員会）は、平成11年度から13年度までの3年間、文部科学省（前・文部省）から教養教育改善充実特別事業費の配分を受け、本学の教育改善を進めてきた。ところが、本年度はその募集がいつまでも明示されなかったために、やむなく学長裁量経費を申請することになった。学長を始め、多くの方々の理解と尽力により申請は受理された。そこで、本年度は学長裁量経費を財源として、これまで通りに教養教育の授業の改善と充実を図ることを主目的として、その企画・研究・実践を実施することができた。

このように、本年度はこれまでの財源を確保できないこと、我々は大いに戸惑った。こうした事態になって始めて、資金なくしては「アンケート」ひとつも作成することができないことを思い知った。お金がなければ何もできない。当たり前のことと言えば、当たり前のことだ。我々の認識が甘かったと言われればそれまでだ。

では、来年度からどうしたらいいのだろうか。もし、来年度に文部科学省から教養教育改善充実特別事業の募集があるならばそれに募集し、そこからの財源確保に努めることになるだろうが、期待は薄いだろう。万が一募集があっても、それには

ずれたり、申請経費を半減されたりすれば、FD事業をまったくできなかつたり、事業規模を著しく縮小することになる。だが、そうするわけにはいかない。なぜならば、FDは山形大学の財産だからだ。こうした認識を学長を始めとした大学の執行部が共有してくれていたのだろう。今年度は学長裁量経費を本事業に回してもらえた。来年度からも、事業の実施にはこの学長裁量経費を頼りにしなければならぬ。これ以外に確保する財源がないからだ。また、年度当初から財源がなければ、事業に着手できない。たくさんのイベントを実施している本学のFDは、一年間を通して適切にイベントの実施を振り分けていかなければ、主催者側のオーバーワークとなってしまう、一つ一つのイベントの質の低下にもなってしまう。是非とも、年度当初からの安定的な財源確保が望まれる。

山形大学教官研修会「教養教育ワークショップ」

過去の3回のワークショップは、毎年夏休みに入った8月上旬に丸一日学外の会場を借り、午前中は学外講師による講演会、午後は分科会と全体会を実施してきた。夏休みのこの時期に開催してきた理由は、できるだけ多くの教職員にワークショップに参加してもらうためであった。実際、これまで工学部や農学部などの遠いキャンパスからもたくさんの参加者があり、そうした方々を含めて毎回総勢200名近くの参加者にのぼった。このように、夏のワークショップは山形大学の恒例行事に成長しつつあった。

今年度は、夏休み中に実施することができなかった。それは先に記したように、この時期には財源が確保されていなかったからだ。我々は身動きがとれなかった。財源の確保された後期になって、ワークショップの時期を検討することになった。FD合宿セミナーを10月に実施することになると、どうしても11月か12月上旬となった。そこで講師の方と日程調整をし、11月22日という日が決定した。ワークショップは放課後の2時間が当てられ、講演会だけを実施した。

ワークショップには、100名を越す参加者があり盛況であった。だが、遠隔地のキャンパスからの参加者は少なかった。また、参加者の構成を見ると、事務官が多く、教官は比較的少なかった。

来年度からは、本ワークショップは従来どおり8月上旬に開催することが望まれる。山形大学において、このワークショップがFDの啓蒙に果たしてきた役割は計り知れないものがあるし、これからもそれは変わらないだろう。そもそも、山形大学ではこれに代わるような、全学の教職員が一同に集まる会は他にないのだから、このワークショップの意義はその点からも大きいのだ。

本年度のワークショップは、名古屋大学高等教育研究センターの池田輝政教授の講演であった。詳細な講演内容については第1章に譲るが、山形大学の教育改善のためにとても有意義なものであった。

講演題目「間違った評価は教育を改善しない」から、一部の教官は「評価」を「学生による授業評価」や「成績評価」の内容であると期待していた。だが、実際の講演内容は「大学評価」や「組織評価」だったので、若干の戸惑いもあったようだ。また、こうした組織論的な内容であったために、こうした内容は大学の執行部こそが聴くべきであると感想を述べる教官もいた。たしかに、執行部も聴くべき内容であったろうが、やはり我々一般の教職員が聴く内容でもあった。大学構成員は問題を共有しておかなければ、次には進めないのだ。いずれにしても、熱意と誠意に溢れた池田先生の講演に感銘を受けなかったものはいなかったはずだ。

講演会後、我々委員会のメンバーは池田先生と懇親会を持った。そこでは、さらに有意義な話し合いが展開されていった。こうした話し合いをもっと多くの方々と共有できたならば、講演の理解も更に深まっていったはずである。こうしたことをどう企画していくかも、主催者側のこれからの検討課題であろう。

まだまだ学んでいかなければならないことがたくさんある。これからモ外の話に謙虚に耳を傾けていこう。そして、講師の方々との連携によって、大学間のFDネットワークが構築していければ幸いである。

山形大学教官研修会 教養教育FD合宿セミナー

FD合宿セミナーの目的を確認しておこう。それは次の2つである。

- 1 個々の教官が、山形大学を支えることの意義と位置付け、教育の基本的構成要素、各授業科目の存在意義、授業設計、成績評価法などを、改めて主体的に検討し、再構築する。
- 2 教養教育を素材として、学部間の人的交流の拡大・充実を図る。

昨年度に始めて開催したFD合宿セミナーを、本年度も実施した。FD合宿セミナーは、参加者にとってもっともインパクトの強いFDイベントである。それは、他の講演会など違って受身的な態度が一切ゆるされないスタイルになっているからだ。2日間にわたって、指定された時間で、考え、まとめ、発表し、他からの批判をおおぎ、それについて反論するのである。さらに、初めて会ったばかりの人たちとチームを組んで遂行していかなければならない。こうしたことを参加者はほとんど経験したことがなかったであろう。未知のことに積極的に参加する人は、とても勇気のある人である。多くの人は、なかなかそういう気持ちにはなれない。参加しなければならないと思うと、それだけで憂鬱になることだろう。

だが、セミナーに参加し、グループ作業が始まると、そうした思いは一挙に払拭され、参加者は活き活きと自分の任務を遂行していく。それは、本年度のこのセミナーの報告書『Human Interactive Universityをめざして』の「セミナルポ」の写真を見れば一目瞭然だ。参加者の表情はいずれも輝いている。さらに、セミナー参加者の「アンケート」の評価を5段階に数値化すると、「このセミナーに積極的に参加しましたか」という問いに対しては、平均点が2.40と「消極的」な意志が確認されたが、

「このセミナーに参加して良かったと思いますか」という問いに対しては、平均点が3.68とかなり高い満足度が示された。半数以上の参加者が参加して「良かった」と言っているのである。

本年度は、文部科学省からの経費配分が見込めなかったため、9月に入って急遽学長裁量経費を申請して、本事業を実施しなければならなくなった。そのために、この合宿セミナーの計画を立てるのも遅れてしまった。昨年度のセミナーを改良したかったが、そのための十分な時間はなかったため、昨年度とまったく同じ方法かつ内容で実施した。

セミナーの日程は、実施場所が標高1,300m地点にある蔵王山寮なので、晩秋になると積雪の心配がある。実際、昨年度は実施した11月10・11日の一週間前に雪が積もり、主催者側である我々は山寮に行けるかどうかを心配した。そこで本年度は、少なくとも10月中に実施したかった。10月中の土・日曜日の都合良い日を見ると、19・20日しかなかった。これが日程を選んだ理由である。

参加者のアンケート結果を見ると、この実施日がとても悪評である。それは、科学研究費申請の締め切り日直前であることが一つの大きな理由であった。そしてもう一つの理由は、学会が間近に迫っている人もいたということであった。こうしたことを考慮すると、合宿セミナーは8月か9月の夏休み中に実施した方がよいのだろう。

昨年度は初めての実施ということで、主催者側である我々はその準備段階から極度の緊張状態にあった。そしてその緊張は、セミナー当日においても続いた。何か予期しない事態が起こるのでないかという不安があった。もしそうした事態が生じたら、我々は適切に対処できるのだろうか、という心配があった。参加者は決して自主的に集まった教官たちばかりではない。不平不満が爆発する恐れは十分にあった。こうした主催者側の不安は、当然、参加者にも感じ取れたであろう。そうした心配をよそに、第一回目のセミナーは、当初の目標を達成して無事に終わった。

今回のセミナーは、昨年度を経験することによって、主催者の気持ちはそれなりに余裕のあるものになっていた。また、各班に前回の参加者である当委員会のメンバーをそれぞれ1名ずつ配置し、かれらがリーダーとなってグループ作業を進めていたので、進行に不安はなかった。委員会のメンバーは2度目ということで、彼ら自身セミナーに対する不安はなく、精神的にゆとりを持って参加できた、と言っている。

これからこのセミナーに参加される方は、昨年度と今年度の報告書『教養教育 授業改善の研究と実践』のFD合宿セミナーの章を読んでいただきたい。さらに、本年度に発行したFD合宿セミナーの報告書『Human Interactive Universityをめざして』も合わせてご覧いただきたい。これを見ると、セミナーの楽しい雰囲気が伝わってくるはずである。

もしかすると、セミナーの方法や内容が来年度から変わるかもしれない。是非とも、直前に本委員会から配布される資料を読んでいただきたい。どのようなスタイルになろうと、このセミナーを作るのは参加されるみなさま方である。

授業改善システムの構築

山形大学に、学生と教官による授業改善アンケートが定着したことで、「公開授業&検討会」が浸透しつつあることは、FDの大きな成果である。しかし、ここで謙虚に我々の目的とする授業改善について振り返ってみよう

FD事業を3年間実施してきて、学内の定着に大きな成果を見たが、しかしそれによって本当に授業改善されたのであろうか。もしそれとすればどの程度されたのであろうか。それを定量化することはできるのだろうか。大学評価機構から問われたことは、まさにこの点だったのだが、それは外部から問われなくとも自問自答しなければならないことだった。

個々の授業については、学生によるアンケート結果の総合評価から改善した授業を数値として答えることができる。それは3.0の授業が4.0に上昇した、というようにだ。こうした分析は、平成12年度に行なっているのだから、報告書を参考にさせていただきたい。だが、その分析を3年間行なっているわけではない。もちろん授業の良し悪しをこのアンケートの数値からだけで判断することはできないが、一つの指標とはなるし、今のところこれ以外の資料を我々は持ち合わせていないことも事実だ。そこで、この「アンケート」の評点を素材として議論を進めていこう

授業の中には評点が上がっているものがある一方で、3.0以下の低い評点でとどまっているものもある。こうした授業はまったくと言っていいほど改善されていないと判断していいだろう。それでは、こうした授業に対して組織的に何か手を差し伸べているのだろうか。いや、まったくそれはない。たしかに、改善するための資料として、全員に履修者の声が掲載されている「アンケート」の原本を返却しているし、改善のための具体的な処置法としての「公開授業&検討会」の誘いもしている。だが、評価の低い授業者がそうしたことを利用したり、参加したりしているのであろうか。我々はそうしたことも追跡していない。我々のFDの基本的な立場が、相互研鑽にあり、決して無理強いはいらないという点にあるので、ひたすら個々の教官の自助努力を待っているのである。

教官アンケートなどから察すると、たしかに自助努力している教官は多い。好意的に見ると、評点の上がる教官も自助努力を怠っているわけではないだろう。しかし、我々の目的が自助努力の追及にあるのではなく、授業改善にあることも確かである。この点を曖昧にすることはできない。

では、どうしたらいいのだろうか。それは、はっきりと目標を設定することではなかろうか。たとえば、総合評価3.0以下の授業については、次回には3.0以上になるように目標を設定してもらおうことである。そのためには、いま何が問題で、その問題をどのように改善しようとしているのか、さらにその改善方法に問題はないのかどうかを点検するのである。

こうした点検 指導に責任を持ち、実施にあたる委員会や部署が必要になってくる。その委員会では、問題点の整理、改善方法の親身な指導や助言、そして実際に改善されているかどうかを授業期間中に指導し、点検していかなければならない。もし、当該の授業の評価を上げることができなかつたならば、それは委員会の担当者にも責任の一端はある。

では、授業改善の有効な方法には何があるのだろうか。その重要な役割を果たすのは、「公開授業&検討会」だろう。これを何度も実施して、地道に改善していくしか有効な方法はない。いずれにしても、こうした他者の手を借りた改善は、お互いの信頼関係を前提としていることは確かである。

授業改善について言えば、それはクーラー設置などの設備面の改善も大きい。予算の伴うもので、一挙にはできないが計画的に実施していかなければならない。このことについても、学生と教官による授業改善アンケートの自由記述などから、クーラーや調光式照明の設置など着実に改善されてはいるのだ。

だが、こうしたことも「今年度の具体的な改善目標」として年度当初に明確化しておかなければならないのではなかろうか。その目標のなかには、3.0以下の授業の改善や自習室の設置、クーラーの設置などが含まれるだろう。こうした目標があってこそ、年度末にどの程度改善されたか、という改善率を示すことができる。

ここで提案した「今年度の具体的な改善目標」などを提言する委員会は、この教育方法等改善委員会なのだろう。そして、それを教育委員会に持ち上げ、そこから担当の委員会や部署に回すことなのだろう。そして、年度末にはそれを逆方向にたどって、改善を検証できることになる。

以上述べてきたことは、授業改善のシステム作りのことである。そのシステムは、構成員を抑圧したり疎外したりするものであってはならない。山形大学に適した健全なシステムを早急に検討し、構築していかなければならない。

高大連携について

大学の「ユニバーサル」化に伴い、大学ではさまざまな学生が混在して学ぶ状況になってきた。もはや大学は「優等生」という均質な入学者を対象として、「エリート」を輩出する装置ではなくなった。それかと言って、「大衆」という均質な集団を生産していくわけにはいかない。大学は、「多様化」と「個性化」を前提として、学生の能力や技能を伸ばす高等教育機関に変貌せざるを得ないのが、我々のおかれた状況である。

これまで大学は孤高を保つ存在だった。そして、それを保持するために、社会との接触を意識的に避けてきた感がある。それはもっとも身近な教育機関である高等学校ともしかりである。そもそも、我々は高校を身近な存在だと思ったことはなかったのではないか。我々は、高校と深い溝があつてしかるべき、いやなければならないとさえ考えていた。そうした大学人であっても、小学校と中学校、そして高等学校の3者は適切な連携がなければならないと思っている。それが高校と大学の間では、飛躍や不連続性があつても、いやあつた方がいいとさえ思っているのはなぜだろう。それは、高校生のなかから選抜された優秀なものだけが大学に入学してきて、そうした学生だけを相手にしてきたからだ。だが、少なくとも山形大学は「エリート校」ではない。山形大学は入学した学生に素晴らしい教育を提供し、そのなかから社会的「エリート」が出てきても別に構わない。だが、「エリート養成」だ

けに血道を上げる大学ではない。

大学は、一人一人の学生の能力を伸ばしていかなければならない。そのためには、高校教育と大学教育をスムーズに連結し、適切な教育方法を構築していかなければならない。もはや、大学や教官の一方的な押し付けによる教育は成立しないのだ。こうした前提に立って、本委員会は高大連携を模索している。

高校側には、高校側の現実的な問題がある。それは大学受験である。そこには、よりたくさんの大学合格者を出したい、という切なる願いがある。そうした状況にあって、高校と大学の話し合いを持つと、それは受験に話題が集中することになる。

大学全入時代の突入により、大学間の学生獲得競争は熾烈になっていく。山形大学も、独立行政法人化によって、志願者の減少は大学存亡の危機になる。このように、大学サイドから見ても、受験生確保のために高校側に情報提供や宣伝をしていかなければならない状況にある。

受験だけの話題で、教育機関である高校と大学が正面きって話すのはかなりさびしい限りではないだろうか。大学は、入学後のより効率的で適切な教育体制を組むために、入学者の実態調査をするために高校からの話を聞きたいのである。高校にしても、生徒が大学に入学したら終わりではなく、大学に入学した後、教え子が成長しているのかどうかを把握する必要があるだろう。このような視点に立てば、自ずと高大連携のあり方は一定の方向性が見えてくるのではなからうか。高校の教師は、教え子が大学に入学して伸びていなかったならば、大学の教師と一緒にその対策などを考えていく必要があるだろう。そして、もし大学側が対策を講じなかったならば、高校の在學生にその大学を勧めなくなるだろう。このような、高大連携がこれからは望まれるはずだ。

大学は高校教育が悪いと言い、高校は中学が悪いと言う。そのような愚痴の連鎖はやめよう。我々はそうした生徒や学生をどのように教育していくか、ということだけが問われているのである。

大学教育は、高校のそれまでの教育と違って、自学自習のできる自己学習能力の開発に重点が置かれている。しかし、大学に入学してそうしたことにとまどう学生も多い。大学自身も初年度学生の教育方法の開発を進めていかなければならないだろうが、もっと積極的に高校生段階にもそれができるように、高校生に対して、大学からの指導や助言が必要な時期にあるのかもしれない。とにかく、大学と高校は双方向的な交流を深めていかなければならないのは確実だ。

高校と大学との話し合いは緒についたばかりなので、まずはお互いの情報提供と、何が問題なのかをピックアップすることから始めなければならない。いかんせん、これまでまったく言っていないほど、情報交換はなかったのだから。そこで本年、本委員会が中心となって、「山形県高等学校教諭との懇談会」を実施した。懇談会を持つにあたって、受験のことはメインテーマにせず、下記のような具体的なテーマが設定された。そこで話された内容については、下記の記録を読んでいただきたい。ここでは、その話し合いについての感想を2・3述べることにする。

まず、これまで高校と大学でほとんど情報交換がなされていないことがあらわになった。それはこれから改善していけばいいことだろう。山形大学サイドの問題としては、情報発信の一元化が求められている。高校からの指摘によれば、大学説明会の案内が学部や学科によってばらばらであるとのことだった。高校では、山形大学という一本の組織で見ているのに、こちらは学部や学科の集合体的な対応をしてきたことに問題が生じているのである。これは、速やかに直したほうがいだろう。

実際は、山形大学内においても、他の学部がどのような取組をしているのかを多くの教員は知らないでいる。それは山形大学のパワーを拡散し、弱めることにもなっている。下記の報告を見ても分かるように、工学部の高大連携の実績は、学内は言うに及ばず、全国レベルでも秀でている。工学部がこれまで培ってきた高大連携のノウハウを全学に公開し、共有化する必要があるだろう。高大連携ばかりでなく、あらゆる事象で学内連携がいま以上に深まっていかなければならない。学部間の競争によって山形大学が発展していくならそれはそれで望ましいことだが、実際にはそのような状況にはない。大学の生き残りのライバルは他大学である。

高大連携は、大学入試という点から、人間の教育という長期的な時間軸のなかに問題をシフトしていかなければならない。その具体化のためには、高校と大学の話し合いを本格的に進めていかなければならない。

「山形県高等学校教諭との懇談会」について

日 時 平成14年11月28日(木) 14時30分から16時00分
会 場 山形県教育センター(天童市)
出席者

山形県 大場山形南高校長(山形県進学指導連絡協議会会長)、進路指導主事等 21名
教育庁 黒田高校教育課課長補佐、小原高校教育課主任指導主事、石川指導主事、細谷指導主事

山形大学 副学長 鬼武一夫
人文学部 立松 潔、奥村 淳、中村三春
教育学部 石島庸男、須賀一好、渡邊誠一
理学部 尾方隆司、丸山俊明、佐藤泰哲
医学部 渡辺 皓
工学部 横山晶一
事務局 木原学務部長、加賀教務課長、大瀧入試課長、阿部教務課課長補佐、大場教務課教育企画係長、奥山教務課教務係長

細谷指導主事から、開会のあいさつがあり、懇談については、黒田高校教育課課長補佐が進行役を務めることとなった。

次いで、黒田課長補佐から、今回は昨年に引き続き2回目の開催となる等のあいさつの後、高校側の出席者の紹介があった。

次に、鬼武副学長から、昨年、それまでの高校長懇談会で

はきめ細かな相談はできないとのことから、高校教育課と相談し、平成13年11月26日(月)に懇談会を開催願った。このたびは、高校教育課を通じて本学に打診があり、本学としても積極的に開催したいとの考えがあったことから、この第2回目の開催となった。機会をいただいたことに、御礼申し上げたい旨あいさつがあり、山形大学の出席者の紹介があった。

(懇談内容)

1 高大連携の推進に向けて

(1) 連携の具体的方策について

黒田課長補佐から、「高大連携」ということで、現在、全国的に単位互換等をはじめ、大学と高等学校との間で様々な連携が行われている。その中で、山形県としても、「高大連携」の具体的方策について、大学と高等学校側とで、積極的に進めていきたいと考えている。

今回、懇談する内容として、次の

高校生向け公開講座の可能性

高校への出張講義等

来年度のオープンキャンパスの方針と予定

大学における補習授業

4点を挙げています。まず、と について、意見及び要望というか、高等学校側からお出しいただき、それを基に意見交換を行っていきたい旨述べられ、主として、次のような意見交換があった。

(高校側 寒河江高校 津田) 山形大学からの出張講義を今年は、9月19日(木)に「メイフラワー・カレッジ」として開催し、山形大学の多数の教官から御協力をいただいた。後日、生徒が休みの日にも工学部の仁科先生に教をいただいたと聞いている。この企画は生徒にも評判が良く、大変喜んでいる。是非、来年も計画したいので、よろしく御協力願いたい。

また、要望だが、現在、小白川地区3学部(人文学部、教育学部及び理学部)の「学部説明会」が、9月に実施されているが、この時期はちょうど地区新人大会などがあり、この説明会には一部の生徒しか参加できなかった。高等学校側との日程調整をお願いできればありがたい。できれば、医学部、工学部及び農学部のように夏休み期間の開催であれば、生徒も出席しやすい。

(黒田補佐) 大学でも日程調整はされておられると思うが、高等学校の場合、9月には大会がある。もし、今後、このようなときは、高校教育課に御照会いただければありがたい。高校教育課としては、高等学校側の行事を把握しているので、お伝えできる。

(鬼武副学長) このような体制となって、今年で3年目となる。それまでは、高等学校側からは、7月が良い、8月が良い、9月が良いと。どれを取っても、高等学校間でまちまちであったことから、9月なら良いだろうとのことから、9月に決定した。

確か、前年度の3月までに高等学校側にこの日程を確認していると記憶している。従来、3学部が独自にそれぞれ実施していたことも原因の一つと思うが、今年、本学に学生センターが設置されたことから全体が見渡せることになったの

で、来年は、もっとうまく調整ができと考えている。

この学部説明会への参加者は、昨年、県内高等学校からは、生徒883人、教諭57人、保護者6人の計946人。県外を合わせると生徒1,351人、教諭90人、保護者35人の計1,476人。今年、県内高等学校からは、生徒815人、教諭46人、保護者19人の計880人。県外を合わせると生徒1,517人、教諭94人、保護者113人の計1,724人となっており、本年度は全体的に延びている。主に、2、3年生が多く参加されていたようである。

御意見にあるように、この日程については、今後、可能な範囲で調整していきたい。

(高校側 山形南高校 小川) 開催時期は、学部説明会の対象となる学年によって変わると思う。1、2年生を対象とするなら夏休みだろうし、3年生対象だと10月ということになるが、この時期は模擬試験があり難しいのではないかと。今年、新潟大学が山形で開催した説明会は、10月の日曜日であった。たくさんの参加者があった。

(黒田補佐) 3年であれば模擬試験があり、出たくとも出られないということであるが、休日以外の開催について、高等学校側としての考えはどうか。

(高校側 山形南高校 小川) むずかしい。

(高校側 山形東高校 山口) 土曜日については、学校週5日制で土曜日休みの日になったことから、高等学校として講座を開設している。多くの参加者となれば、日曜日の方が良い。

(黒田補佐) 日曜日での開催は可能か。大学の先生方には御迷惑をお掛けするが。(黒田補佐から、日曜日開催に賛成かどうか高校側に挙手願ったところ、大多数が日曜日希望であった。)

(鬼武副学長) 開催日程については、検討したい。

(高校側) 各高等学校とも、学部説明会への参加する対象学年は3年から2年の方に移ってきている。夏休みの方が良い。

(鬼武副学長) この学部説明会には、いろいろな内容が入っている。オープンキャンパスもあり、体験学習、懇談会等もある。夏休み等に、1年から3年次を対象として、どなたにも参加願えるような内容で実施してきている。

(黒田補佐) オープンキャンパスとなると、1年次、2年次対象となるのか。単に入試のための学部説明会となると3年次対象と考えられる。日程調整については、私どもの高校教育課が当たっても構わない。その辺を含めて調整の上、御検討願えればありがたい。

(鬼武副学長) 持ち返り検討したい。

(黒田補佐) 公開講座についての御意見はないか。

(高校側 酒田東高校 富樫) 7月13日(土)の出張講義は評判も良く、来年度も是非お願いしたい。生徒の感想も非常に良く、生徒は、この講義を聴いて、山形大学に入学したくなったと言っている者もいる。日程については、その他の行事等との調整もあると思うが、よろしくお願いしたい。今後とも、是非、御協力願いたい。

(鬼武副学長) ただ今のお話は、出張講義のことであるが、可能な限り要望に添って対応している。今後とも対応してい

きたい。

公開講座については、具体的にどのような御要望なのか。(細谷指導主事) 仮に山形大学で高校生対象の講座を開く場合、山形市周辺の高校生は出席可能であるが、米沢、鶴岡、新庄地区等では困難である。これについて、何か御意見を伺いたいとのことから、懇談会の話題として出させていた。

(人文学部 中村委員) 人文学部では、一般向けの公開講座を開設している。今年は2講座を開設している。一般者は5,800円、高校生は無料で行っている。参加者のうち過半数は高校生であった。高校生からの評判も良く、ワークショップや終了後の懇親会にも出席されていた。寒河江高校からも数人の参加があった。一定の人数の要望があれば、仮に米沢地区であれば工学部の講義室をお借りしてでも開設は可能と考えている。

(鬼武副学長) 他にはどうか。

(教育学部 石島委員) 一般向けに4講座を開設している。新庄地区でTV会議システムを利用して実施している。今年度は、鶴岡地区も結んでシンポジウムを開催する予定である。今後は、大学全体としても可能になっていくと考えている。

(理学部 佐藤委員) 学部説明会については、どうしても学部紹介としての性格が強くなる。他県からも来るので、午前中は主に近隣の高校を対象にしたオープンキャンパス(体験入学)とし、午後にシフトする内容もある。夕方には帰られるような設定が必要である。結果的には、午前、午後どちらにも出られるようにしている。

公開講座については、以前、文部科学省(当時文部省)の承認を受けて開設していた。それは参加費が高額であった。文部科学省のそういった規制も緩和され、また、高校生にたくさん参加してほしいとのことから、今年から高校生向けに500円で開設している。たくさん参加を待っている。

(医学部 渡辺委員) 公開講座は医療職専門の講座が中心だが、中には、疾病関係で高校生にも聞いてもらっても良い講座もある。

学部説明会については、医学部の年次計画として、8月の第一金曜日と定めている。むしろ、これを高等学校側で決めておいていただいた方が良いと思う。参加者へのアンケート結果を見ても、日程については問題はない。8月であれば、入試情報についても話せるので、問題はない。午前中は説明中心で、午後に見学を実施している。

(工学部 横山委員) 工学部としては、高校生向けの公開講座は特に開設していない。今後、検討していきたい。一般向けの公開講座はサテライトで開設しているが、米沢だけではなく、山形市の遊学館や霞城セントラルでも開設している。

体験入学は、フルシーズンで受け付けている。例えば、授業の状況を後ろから入って見学させる等の方法も行っている。

また、出張講義も行っている。私は工学部のセールスマンとして、対応している。遠くは愛知県まで出向いている。

4月から12月まで、全国139校に出向いている。これは、

今後も継続していく。

(黒田補佐) 公開講座は、山形大学では一般向けだけではなく、高校生向けも開設している。しかし、高等学校側で生徒の参加状況等を把握していないし、理解がまったくない。今後とも、山形大学にはよろしく願いたい。

(高校側 山形北高校 渡辺) 例年、一日総合大学として、山形大学から御協力いただいてありがたい。日程に関しては、毎年、実施日の少なくとも2ヶ月前、できれば3ヶ月前までにお知らせし、お願いしているので問題はない。

本校の生徒の志望大学としては山形大学がメインであり、非常に意欲を持って望んでおり、生徒の評判も良い。来年度はもっと多くの先生にお願いしたいとの要望も多い。

(高校側 新庄北高校 高山) 「日総合大学」として実施している。このような形式で実施するようになり、今年で3年目になる。終了後も、貴重なアドバイスをいただき、それを参考にさせていただいている。来年は年1回ではなく、1年を通じて何回かお願いしたいという声もある。

公開講座の場合、新庄地区は「狭間」であることから、そもそも公開講座の情報がない。いつどこでどのように開設されているかも分からなかった。今伺った高校生も聴けるといことは知らなかった。また、先ほど新庄地区でTV会議システムを利用して開設していると聞いたが、全然分からなかった。せっかくのこのような行事を、もっとピーアールしていただきたい。情報をお願いしたい。

(黒田補佐) ただ今のお話のように、せっかく良い公開講座を開設しておられるが、高校の現場でも情報が分からない場合が多い。高校教育課としても、もっと周知していきたい。

(大場山形南高校長) 10月7日(月)の本校創立記念日に理学部(天文学)柴田晋平教授に御講演をいただき、大変好評であった。このような連携のあり方もあるのだと思っている。謝金は些少で大変申し訳なかったと思っている。このような形式で開催することになったのは、3年前からである。以前はOB、旧職員等、3年前から著名人(ダニエルカール等)にお出でいただいたりしていたが、謝礼が高額になることから、生徒1人から500円をいただいてそれに充てている。

本日いただいた資料にも、御講演名や講演者の氏名を載せていただければありがたい。

(人文学部 中村委員) 私の経験上として申し上げたい。出張講義は、通常1回だけの講義である。この1回でどれだけ伝えられるかである。単純に時間が足りない。生徒の感想もそうであると思われる。これには、例えば、こちらで予習するための資料を事前に配布する等、ある程度の水準に達した段階で実施すべきと考えている。取りあえず、受ける側にも少し準備してもらう必要がある。

また、「出張講義」という名称は止められないか。もっとユニークな名前にすることで全国へも発信できるのではないか。例えば「サテライトカレッジ」等とかでどうか。

(黒田補佐) そうですね。

(工学部 横山委員) 11月19日(火)に栃木県の石橋高校に行ってきた。毎年実施しているので、生徒は最高で1年次から3年次まで3回聴けることになる。23のテーマで、生徒は午前に90分の授業を聴き、午後は分科会として開催し、

各テーマについて発表する。講師がその分科会に出席しコメントする。石橋高校は、ここ3年、このような方法で実施している。このため、同校はそのような取組みに「教育奨励賞」をもらったと聴いている。

我々が駅に着くと教諭からの出迎えがあり、学校に行くと生徒が、司会、記録係等をそれぞれ分担してやっている。その姿がすごく感じが良かった。学校が一丸となって対応してくれる。

(黒田補佐) 今のお話を聞くと、これからは高等学校側として準備することによって、更に良いものになると感じる。

(高校側 山形南高校 小川) 大学の先生から学んだものが、どのように生かせるかという視点で行いたいと思うが、出張講義で丸1日授業をつぶせるかという不安がある。土曜日もなくなり、たとえ1日たりともという気持ちである。本校には理数科があり、横山先生に御協力願っている。この理数科は、夏に蔵王で合宿があり、横山先生に企業をピックアップしていただき、そこを訪問してくることもある。やはり、1日をまるまる使うことに不安が残る。この辺の事情を御理解願いたい。

(黒田補佐) 高等学校側としては、確かにそのような1日かけられる部分とそうでない部分ということで、悩みがあると思われる。

(高校側 鶴岡中央校 田中) 謝礼の話が出たが、実際、どのようになるのか。進路ガイダンス的なものをお願いした場合、鶴岡なので、簡単に時間を割いて来ていただくわけにはいかない。

(鬼武副学長) これと言った取り決めはない。各高校との話し合いで行っている。交通費等の実費はいただいているようである。それ以外については、私も分からない。今後、平成16年度の独立法人化となった場合、どのようになるのかわからない。ある意味で収入を上げなければならなくなると思われるので。放送大学は、2単位で1万円となっている。

(黒田補佐) 謝礼については、各高校の対応ということのようですね。

来年度のオープンキャンパスの方針と予定

(黒田補佐) 来年度のオープンキャンパスは、どのように考えておられるのか。

(鬼武副学長) 人文学部、教育学部及び理学部は、今年と同様、同時開催と考えている。先ほど要望として出された「日程」については、調整させていただきたい。医学部、工学部及び農学部は、夏休み8月になるものと思われる。

小白川地区3学部を一本化して実施するようになったのは、3年前の高等学校長会の折、要望があり、それにできるだけお答えしようとのことから、このような開催となった。日程の要望については、すべての高等学校に対応することは大学のマンパワーの問題もあるので困難であり、ケースバイケースで対応したい。ただし、8月の開催に要望が高いということは、各学部長に伝えたい。持ち帰り、検討させていただきたい。

(黒田補佐) ただ今のお話のように、山形大学と高等学校長

会との話し合いの下、小白川地区は、このような開催方法となったとのことである。一方、大会や模擬試験もある。少なくとも、小白川地区3学部は、一緒に実施されるようである。

(鬼武副学長) そのように考えている。

(高校側) 説明会等の案内が、各学部ごとにバラバラに来ている。何とかまとめていただけないものか。

(高校側) 新潟大学の案内は、一冊にまとめてきている。そのため、一回で回答が可能である。

(鬼武副学長) 山形大学は分散キャンパスであり、これまで少なくともそれぞれの学部で対応してきた。今回、事務一元化も進んできており、やっとまとまってきたところである。今後、日程等が定めれば、一本で周知できると考える。これも持ち帰り、御要望に添えるように検討したい。その際、各学部の意向も聞いていきたい。

(高校側) 事情は分かるが、オープンキャンパスの日程調整だけでは、お願いできればありがたい。オープンキャンパスの案内等については、まとめていただきたい。

(高校側) 説明会の案内は、学級担任が生徒へホームルームで話しているが、締切がバラバラのため、一番早い締切に合わせざるを得ない。理学部は、学科ごとの締切であった。

大学における補習授業

(黒田補佐) 「大学における補習授業」について、御意見を伺いたい。

(鬼武副学長) 本学の実状からお話ししたい。今年度実施している内容を資料として配布している。これは基礎学力の向上を図ることを目的としているが、専門高校卒業生合格者を対象としているが、中には普通高校を卒業した学生でも希望があれば受講させている。

(黒田補佐) この資料にあるような科目の学力が低い。このことから、大学として、このようにきめ細かな教育を行っているとのことか。その辺の背景も伺いたい。

(工学部 横山委員) 専門高校は、工業系の専門学校である。人数は少ないが、大学の授業にギャップがありついて来れない学生を対象としている。特に工学系高校の場合、授業を受けるほかに実習も取らなければならず時間がないようである。

しかし、問題なのは、このような学生ではなく、普通高校を卒業していながらついていけない学生がいる。そのために、20~30人の学生が受けている。

更に、大学では、「物理学」については、能力別(アドバンストベーシックに分けて)で教育している。入学したときの進度で振り分け、受講させている。結果として、効果が上がっている。最初は、差があるが、終わりには他の学生のレベルと同様まで来ていると聞いている。

(鬼武副学長) 「補習教育」という名称では、このように実施している。今話された教養教育としては、理科系科目の「一般教育科目の「生命・環境領域」と数理・物質領域」で、高校での履修状況に合わせ、「一般コース」と「発展コース」として開講している。基本的には、既に高校で履修している学生は「発展コース」を、未履修者には「一般コース」を履修す

ることになっている。

(人文学部 中村委員) 基礎学力の改善ということで、他大学の取組状況を調査している。その中で、弘前大学では、英語について、普通レベルと発展レベルの幾つかのコースに分けて行っている例などもあり、基本的なリテラシーをどのような方法でやっていくか模索しているところである。

(理学部 佐藤委員) 本当に学力低下なのか。今の学生には、学ぶ意欲がなくなったのではないか。理学部に入学してくる学生のほとんどが、高校で化学を履修してきている。理科2科目なので「化学、物理」、「化学、生物」となっているのが大多数である。

例えば、高校で「物理」を履修していない場合、大学では困難と聞いている。これは学力低下だけではない。

一方で、学ぶ意欲の問題もある。3年前、理学部では、1年次開講の「科学の世界」の中で、高校教育との橋渡しをできないかと考えた。しかし、学部全体の共通理解を得られるまでには至らなかった。

(黒田補佐) その辺のところは、高校側としてどうか。

(高校側 山形南高校 小川) 結論からすると、仕方がない。大学も大学院へシフトして、育てていただきたい。高校側としても、「物理」の力がない生徒が多数いることは承知しているが、もともと中学を出た入り口の段階の力がなく、このできない生徒を出口まで育てることは困難である。中学あたりから、もう少し勉強をしていただかないと無理である。

(理学部 佐藤委員) 昔、私が大学へ入ったとき、大学は「最高学府」であった。今は誰も思っていない。言われたように、大学を大学院にシフトする必要がある。しかし、このような考え方は、現時点では、同僚に理解されない。

(黒田補佐) 指導要領も変わってきており、何とか教育していただきたい。

(人文学部 中村委員) 教養教育では、学生主体型の授業を、今日出席の立松先生、小田先生が中心となって実施している。この授業は学生中心の授業である。モチベーションをとらえる授業である。何のために学ぶのかを、今の生徒は忘れている。このことを、高校と大学双方で植え付けていく必要がある。新庄北高校に行って「地理」の授業を聞かせていただいた。非常に良かった。私も生徒として受けたかった気がした。今の生徒に足りない分は、高校と大学とで補っていくべきである。

以上のような質疑及び意見交換の後、黒田補佐から、その他としてなければ、次の会議も予定されており、懇談を閉じた旨述べられ、懇談会を終了した。

最後に、細谷主事から、閉会のあいさつがあった。

(配付資料)

平成14年度山形大学学部説明会等実施概要一覧
出張講義等派遣教員一覧
補習授業について

(手持資料)

学部説明会参加者数(平成13年度、平成14年度)
高大連携の他大学の現状等(文教ニュース等から)

教育改善のドライビング・フォースとしてのFD

授業改善とは何だろうか？ 我々が行き着く先には何があるのだろうか？ 日々の授業改善の先には、本当に素晴らしい未来があるのだろうか？ そのような質問に答えるのは、FDの任務ではない。山形大学がどのような教育を授けたいか、どういふ人材を社会に輩出したいか、そうした目標や理念はFDの委員会ではなく、別のしかるべき委員会で構築されるべきことだ。そして、その目標を具現化するためにカリキュラムが組まれ、個々の授業の改善項目が明確になっていくのだ。

FDはその明確化された目標に向かって走る車(組織)の駆動力(ドライビング・フォース)である。そうした意味では、目的地があってもこの駆動力なくしては決してたどり着くことはできないし、それが立派に働かないと、いつ着くかもわからない。

FDは常に保守点検し、時にはバージョンアップをしなければならない。山形大学でもFDが本格的に始動して3年経った。もう一度点検し、バージョンアップを図らなければならないだろう。

見直さなければならない点は、FDの参加者の固定化である。ワークショップや講演会に参加する教官の顔ぶれは固定している。そして、これまでまったく参加していない人もいる。これからは、FDの参加を義務付けるなんらかの方策をとっていかなければならないだろう。いつも参加している人たちの不公平感はかなり高まっているのだ。これまでにFDへの呼びかけは十分にしているので、これからはFDの義務化をどう具体化していくかが問われている。正直者がバカを見る組織であってはならない。

さいごに

我々はヴィジョンを持たなければならない。それもみんなが共有できる魅力的なヴィジョンだ。そして、ゴールを目指して周回準備をし、スケジュールを組まなければならない。そうしたしっかりとした構想のなかでこそ、日々の着実な授業改善を進めていくことができる。それは、確実に学生・教員・職員を素晴らしい地に導くことだろう。